

メアリー・リッチモンドのソーシャルワークの機能論省察

Reflection of Ideas and Discussion on Social Work Function by Mary Richmond

平塚 良子

Ryoko HIRATSUKA

メアリー・リッチモンドのソーシャルワークの機能論省察

平塚 良子

(西九州大学健康福祉学部社会福祉学科)

(平成25年11月13日受理)

Reflection of Ideas and Discussion on Social Work Function by Mary Richmond

Ryoko HIRATSUKA

*Department of Social Welfare Science, Faculty of Health and Social Welfare
Science, Nishikyushu University*

(Accepted: November 13 , 2013)

Abstract

This article is about reflecting social work function which is an unmarked element extremely by social work method's advantage. Author discussed about 4 articles by Mary Richmond, one of fore-runners in social work at the beginning of 20 century, focusing on social work function. Author finds that Richmond suggests new and important ideas of social work practice in those days. Some of them are still hard tasks and not considered enough even today. In the following, author presents her meaningful points.

- (1) Co-operation means that social workers use power of resources.
It gives us some ideas: intervention between people and their environments, and holistic view.
- (2) Retail method is one of ways and functions of social reform, which is not recognized by people belonging to the group of social settlement movement.
- (3) Middleman means a symbolic function in social work. It will take a role of mediating between people and their environments.
- (4) Social work rhythm shows us rough sketch, the prototype of social work function, which is not structured appropriately at present.
- (5) Ideas of Co-operation and middleman suggest a possibility of characteristic boundary work in social work.

Author finds that Richmond has prescience of social work practice from her acute observation and criticism.

キーワード：ソーシャルワークの機能論、方法優位の転換、メアリー・リッチモンド、ソーシャルワーク機能の原型

Key words : discussion of social work function, switch from social work method's advantage, Mary Richmond, the prototype of social work function by Richmond

はじめに

我が国では、今日、社会福祉及び関連領域の法や制度改正により社会福祉の職域が拡大しつつある。これにともないソーシャルワークの機能が発揮される実践現場も、関係団体の設立等含めて拡大の方向にある。それは、専門分化と多様化が起きることであるが、各領域の特殊事情も反映して当該領域内で閉じられたシステムを形成しやすく、いわゆる、領域や分野、機関や施設ごとに自己完結型を招きやすい危険性がある。一方、ソーシャルワーカーは、他の専門職や関係機関、地域の多様な関係者との連携・協働機能をより発揮することが求められる時代になってきた。それだけに、ソーシャルワーカーは連携・協働といったコンセプトや意義、視点等を明確にもっておかなければならない。しかしながら、ソーシャルワークの教育や実践、研究においては、長らく「方法優位」の時代が続いている。方法は、how to という物事についての一連の手続きという意味でしかないが、プラグマティック志向の下での専門職業化の進展に伴い、方法の巨人化が起きてきた。方法優位は、一定の成果はおさめつつも限界がある。方法の下に多様な要素が詰め込まれて後背に下げられ、本来の各要素が陰ってしまうからである。近年、方法は、ジェネラリストアプローチなどの表現を多用するようになってきたが、その構成は、方法優位に変わりがない。主要な要素でありうる、価値、視点・対象認識、機能（下位レベルの役割・機能含む）、技能など他の重要な構成要素の影は薄い。したがって、方法に囚われた思考態度の転換が必要ではないだろうか。他の要素に正しい位置をもたらすことで、ソーシャルワークの理論はもっと豊かになるのではないだろうか。how to に飲み込まれるのではなく、ソーシャルワークとはなにか、共通部分をなす、その幹を太くしなければならないのではないか。そういう点で、ソーシャルワークの構成要素についての探究は重要である。

本稿では、こうした問題意識から、ソーシャルワークは何をするのかという、基本に立ち返るために、ソーシャルワークの機能に焦点化する。機能をめぐる問題や課題の所在を確認しつつ、ソーシャルワークの萌芽期から基礎確立期においてソーシャルワークにおいて重要な貢献をなした Mary Richmond のソーシャルワークの本質的な機能、その特性に関わる主要な論考に焦点化し、その今日的意義を示したい。なお、本稿でとりあげるリッチモンドの機能論を、リッチモンドの提案により、ソーシャルワークにとって重要な会議であった全国慈善矯正会議を全国ソーシャルワーク会議に改称した1915年の前と後の2期に分けて展開する。

1. ソーシャルワークの機能をめぐる問題の所在

(1) ソーシャルワークの介入特性から生じる課題

ソーシャルワークが抱える問題をかつて Queen, S.A (1922) が見事に表現している。ソーシャルワークの基礎が確立されようとする頃、クィーンは、研究者の最も困難を感じる点は、ソーシャルワーカーの仕事は「何処に始まり何処に終わるか見さかのつきかねることである」¹⁾としたように、その萌芽時代から、明確な守備範囲を規定することが困難であったことがうかがえる。

クィーンのそれは、ソーシャルワークは何を対象に何処まで展開するのか、その範囲や機能についての見解をさしている。90年を経た今でも、この指摘は、当を得た見解といえるかもしれない。今日においてもこのような指摘同様、ソーシャルワークは社会の影響を強く受けやすいために、しばしば、その機能や守備範囲において自己規定に戸惑う面が少なくないのもまた事実である。それは、ソーシャルワークのアイデンティティの問題である。同時派生的に、ソーシャルワークを実践するソーシャルワーカーとは誰で、何をやる人か、言い換えれば、私は何者かをどのように自己規定をするかというソーシャルワーカーのアイデンティティにつながる。このことは、ソーシャルワークの価値や視点・対象認識、機能、方法、技能等の基本的な枠組みが何であるかを通して自己を規定するということである。時代や社会の変化とその影響を受けながらも、ソーシャルワークは、そしてソーシャルワーカーは、たしかに国や地域によって違いはあるが、共通点は、多様な社会制度領域において実践していることは変わらない。

特にどこに介入するかは、ジベルマン (Gibelman, M) (1999) が称したように、ソーシャルワークは、残余領域におかれた対象階層に介入する点を特徴とし、それゆえに多様で流動的な側面がある²⁾。ソーシャルワークは、他の社会制度をもってしても、あるいはそれを活用しても、なかにはそうした社会制度から放置や排除された人々など、社会的に脆弱性の高い人々の生活に関与することが特徴としてある。このような点でソーシャルワーク実践における機能の多様性や流動性、自在性、実践領域の分化や多様化などは、実は、ソーシャルワークのユニークさゆえなのである。この特徴を十分に把握しておかないとソーシャルワークが何であるか、見えづらくなり、アイデンティティの拡散も招きやすい。ソーシャルワークが、このような専門職業だけに、ソーシャルワークとは何であり、何のために、何をやるのか、恒常的に問うことは不可避のテーマであろう。

モラレスとシーフォ (Morales, T.A and Sheafor, B.) らの1977年に出版され何度も版を重ねてきたテキストのタイトルは、ソーシャルワークのユニークさを物語る『多

くの顔をもつ専門職』である。その本質が示すところは一つの顔である。モラレスらは、ミッションとして、Caring、Curing、Changing の3つをあげる。これらは機能と言い換えられるが、これならば対人援助職の多くがあげられるようなものであり、ソーシャルワークらしさのある機能といえるかどうか、疑問が残る。また、モラレスらは、人間と環境との接触面領域に発生する問題、或いはその変化を起こす領域を「ソーシャルワーク介入の焦点図」としている。それは対象と機能の不可分な関係を示すものであるが、ソーシャルワークの機能としての明示はなく、多次元的アプローチに収斂させている。即ち、方法優位とかわりがない³⁾。

(2) ソーシャルワークにおける機能の位置づけと体系的性

ソーシャルワークの機能については、とりあげられ方が実践の方法や、方法の中のアプローチによっても異なりも見られ、ありていにいえば、ばらばらで多様な機能が設定されている。いわば、無秩序状態といえるかもしれない。かつて、ベーム(Boehm, W.W)(1958)は、ソーシャルワークの本質論のなかで、ソーシャルワークの機能を、損傷からの回復、資源の確保、予防という3機能をあげている⁴⁾。それはよく引用もされてきた。ほぼ同時代に岡村重夫(1955)は、一定の論理構成でもってソーシャルワーカーの本質的な機能として専門的援助機能を示している。このほか、今日では、一般的には、伝統的な機能論を意識しながら、必要に応じて、具体的な機能が組み立てられたりして抽出された機能が並列的に配置されることが多い。中には、より多様な設定が見られるものもあるし、ソーシャルワークの機能とか、ソーシャルワーカーの機能であるとか、違いがある。このようにソーシャルワークの機能に関してはカオスといってもよいような状況にある。

そこで、機能をどのように位置づけるのか、その内容をどのような論理でもって説明するのか、この点に言及してみる。

機能(function)という言葉は、辞書風にいえば、選択的に設定されたある目的に適う作用ないし働きを意味する。つまり目的達成のためにある対象に作用することなのである。してみれば、ソーシャルワークの機能は、「ソーシャルワークの価値に基礎づけられた目的達成のための作用」(平塚良子, 2002⁵⁾)を意味する。つまり、ソーシャルワークの掲げる価値の実現のために選択的に設定された合理的な目的達成に適う作用ということになる。とはいえ、ソーシャルワークの機能をいうとき、無秩序に設定された機能をさすわけではない。知的に秩序立てられた構成がなくてはならない。ソーシャルワークの構成要素の中での位置、機能の内容と配列は、特徴と体系的な構造が本来なければならない。その形態は、樹

状性とか、上位や下位といったレベルがある階層性、機能同士の相互の連関性等々が工夫され体系的に組み立てられなければならないであろう。しかしながら、今日においても、このようなソーシャルワークの体系的な機能の構成が示されたものは、あまりみられない。

そうしたなかであって、社会福祉学を実践科学とする岡村重夫(1955)は、社会福祉理論の体系的な枠組みのなかで機能論を示している。それによれば、「生活困難を修復するはたらき」を機能とする。ソーシャルワーカーという専門職業としての成立には、福祉問題解決のための実践の視点から社会福祉固有の問題を認識し、解決を図るためにソーシャルワーカーの専門的援助機能論を展開し、福祉的援助の機能(社会福祉の機能と同一)を位置づける。即ち、固有の視点(対象把握の原理)を基軸にした社会関係の枠組みをもつ対象論と機能論を不可分とし、社会福祉固有の視点から社会福祉固有の対象と機能の特長を示すのである。この機能のもとに、社会福祉の方法を位置づける⁷⁾。その後、機能については、「ソーシャルワーカーの一方的な専門的機能ではなくて、福祉固有の視点としての社会関係の主体的側面に立つところの生活困難回復の機能」を意味するとした。生活困難の修復が個人的に解決できないときに、社会福祉の援助対象となり、ソーシャルワーカーの機能になるという意味で社会福祉の機能とし、社会福祉の機能を、個人のもつ社会関係の困難を自己修復する機能⁸⁾とする。

岡村のように、社会福祉学がとりあげるべき問題領域とそうでない領域とを明確に弁別し、固有の視点・対象との関連において機能を明確に位置づけたものは数少ない。機能の位置づけと体系的構成という課題に加えて、ソーシャルワークの専門職業化がさらに進んできた今日、ソーシャルワークの機能をソーシャルワーカーの機能・役割、役割・機能、あるいは単に役割として表現して用い、内容も多様に設定されている場合が少なくない。他面において、ソーシャルワークの機能に関しては、ソーシャルワーカーの役割やソーシャルワークの方法、実践アプローチに沈潜させて扱う場合もすくなくない。加えて、機能は、他の用語表現のなかに含まれている場合もある。あるいは、理念的な価値や専門職業の価値(これもさまざまなレベルが混在している現状にあるが)でもって代替させている場合もある。ただ、価値自体、何らかの影響など作用を惹起するだけに機能を価値の範疇に含めることも、あながちまちがいはいえないであろう。しかし、ここでいう価値は、クライアントの人権尊重を基本に社会生活の安定化を促進し、クライアントの福祉の増進に寄与する理念や実践の価値として明示され、その実現を志向する意味であるから、そのために目的を設定して対象に向けてなされる作用(機能)とは異なるものである。それだけに、両者の区別をしておく必

要がある。

以上のように、ソーシャルワークの構成的要素として重要であるにもかかわらず、機能は、不確かな位置づけにある。また、提示される内容の構成にも幅が広く多様である。社会の変化や実践領域によっても機能の設定には流動的な面があることは避けられないが、ソーシャルワークの機能は、説明されるソーシャルワーク全体の整合性ともかかわる重要な課題であるだけに、その構成のあり方が問われる。

2. M. リッチモンドのソーシャルワークの機能論 — 慈善矯正会議時代

スペクトとコートニイ (Specht, H. and Cortney, M.E.) (1994) らは、リッチモンドの足跡から、リッチモンドは、ソーシャルワーク専門職の発達を他の誰よりも描いた。本人が意図したわけではないけれども、今日の心理社会療法などの専門職の準備をするところとなったと評している。ただ、本人がフロイトやユング、精神医学や精神分析、精神療法などに関心を示していないだけに⁹⁾、後者の点は、リッチモンドにとっては不当な扱いかもしれない。この点はともかく、ここでは、ソーシャルワーク機能、その特性について原初的な形態を示したと考えられるリッチモンドの論考をとりあげ、その意味するところを探ることとする。なお、論考は、公表された順番にとりあげる。

(1) 機能論的側面 1: 「慈善の協同」(1901) から

リッチモンドのソーシャルワークの機能論として、代表的なものとしては、1901年の全国慈善矯正会議の報告において示された “Charitable Co-operation” (慈善の協同) と題する論考であろう¹⁰⁾。それは、リッチモンドがフィラデルフィア慈善組織協会に請われた移籍間もない頃のもので、他都市も含め、当時の慈善組織協会が活発に広範な活動を繰り広げていたことを見直したものである。特に慈善ワーカーたちの行為に適用できる原則としての「協同」を根本的なこととして言及を試みている¹¹⁾。当時、リッチモンドが「社会診断」という表現を用いて申請者についての社会診断過程をすでに案出していたとされる¹²⁾だけに、慈善ワーカーが何を把握して何をすべきか追求していたことは自然な流れであったろう。

リッチモンドは、慈善の協同という場合には、貧困者の援助にしても、慈善のみに制約されるべきではなく、貧困者家庭の生活、彼ら自身に影響するあらゆるところまで拡大することであるとする。それは、特に慈善の資源に対するソーシャルワーカーの思考態度を求めたものである。同時に、それは、斬新な社会資源活用論であり、また、実践における諸力による協同を説いたソーシャル

ワークの機能論であった。それを図式 “Diagram of Forces with Which the Charity Worker May Co-operate”¹³⁾ で表している。

そこでは、A から F までの 6 つの円 (力: force) からなる「慈善ワーカーが協同するかもしれない諸力の図」が示された。最も内側にある小さな円の A から順番に言えば、A 「家族の力」、(家族と最も純粋に個人的に関係をつくってきた) B 「個人の力」、C 「近隣の力」、D 「市民の力」、E 「私的慈善の力」、F (コミュニティの) 「公的救済の力」である。リッチモンドは、慈善ワーカーと呼ばれた人たちが、クライアント (この場合は家族をさす。) と共にできることをいつも考えるのが、協同の精神であるとともに、援助においては、クライアントの最良の力を活用することである。また、力 (資源にもなりうる。) の中では、個人の力 (教会なども含まれている) がもっとも戦略的なポイントだという¹⁴⁾。ただし、その個人に当該貧困者についての知識がなかったり、関心がない場合は、その限りではなく、そうした個人が介入してくることを防ぐ必要があるなど、各資源についても、どのようなものがこれに含まれるのか、分析的に例示しながら説明を加えている。この論考では、資源の分類、資源の配置、諸環境の種類、資源のもつ力についてのアイデアを示しただけではなく、慈善間の協同として、コミュニティの慈善には調和が重要であり、慈善ワーカーにはこの調和のある関係をもたらしことが課題である¹⁵⁾。また、諸機関の本当の意味での結合に欠けるような、間に合わせの慈善の協同では効果はめったにないとする¹⁶⁾。

当時のさまざまな時代背景が絡んでくるのはもちろんであるが、今日の関係者・関係機関の組織化や専門職の連携、協働の機能、そのありようを示唆する重要なものである。また、資源配置の論理は全体論的視点や生活困難の問題解決機能をも示すなど、それは、後の『社会診断』や『ケースワークとは何か』の著作にもつながっているのは無論のこと、ソーシャルワークの重要な概念となる「人間と環境」、両者の同時二元的視点や接触面に介入するソーシャルワーク独特の機能論、方法論の原初形態をなすものであろう。とりわけ、リッチモンドが示した資源の分類や配置、種類とその内容は、まだ当時にはなかった理論であるが、各資源とされるものがリビングシステムであることを示すとともに、そこに介入する機能論を示したことである。スペクトらは、社会システム理論のような何かを有機的に関連づけられなかった時代に、これらの概念を関連づける専門職もいなかった時代に、これらの定式を結びつける社会サービスのシステムのない時代に、リッチモンドはすでにこの実践の概念を持っていたのである。しかも、人間とその状況の理解において問題解決過程の重要部分であると考えていた点

はもっと意味があると評価をしている¹⁷⁾。このように、後年登場する一般システム論的発想を内包していた点については、多様な境界に介入していく実践機能の存在を示唆して意義深い。

(2) 機能論的側面 2 : 「改良の小売りの方法」(1905)から

リッチモンドのこの論考は、*The Long View* 中の “The Retail Method of Reform” (214-221頁) と題した、1905年4月のフィラデルフィア倫理文化協会での講演録で、翌年1月に倫理国際ジャーナルに掲載されているものである。この講演は、慈善組織協会の活動やケースワークに対して攻撃的な批判がなされてきた中でリッチモンドの明らかな反論である。改良の卸売りの方法への批判に対して、アメリカの慈善が失敗であるとは見ないとして、慈善の印象を正そうとする¹⁸⁾。例えば、児童労働改革の例をあげるなどして卸売り和小売りの特徴や両者の関係を示しながら¹⁹⁾、卸売りの方法の問題の指摘や疑問を展開し、社会改良の小売りの方法の必要不可欠さを独自に展開する。

リッチモンドは、援助において、小売りの方法と卸売りの方法という言葉を用いて実践の方法を示したが、それは単なる方法論というよりも、2つの方法の展開を促したソーシャルワークの機能論でもあった。小松源助(1993)の訳によれば、「われわれは、同一の階級の弊害に対していくらかの小売りの仕事についての関心をとおして卸売りの改革に向かっておしすすめられ、われわれの改革がいったん獲得されるや、そこで着手した仕事を完成すべくふたたび特殊なものへとおしかえされる。健全な、かつ、完全なる改革運動はふつう小売的方法に始まってふたたびそこに帰っていく。そして、その上昇及び下降の2つのコースを描いて一つの完全なる環を形づくっていくのである。(中略) 社会改革のすべては、われわれが小売りの方法の注意深い取り扱いの導くままに忠実に従っていった場合に、そこから必然的に展開してくるものである」²⁰⁾。

この上下2コースのサークル運動は、小売りの方法の正当化において非常に重要な部分である。リッチモンドは、社会改良の全体は小売りの方法の中にこそあり、社会改良の成果は、小売りの方法にこそ表れるとする²¹⁾。つまり、卸売りの方法だけが社会改良ではない。小売りの方法は社会改良の一つの形態であると主張している。

革新主義時代における社会改良の運動が隆盛する流れにあって、個人援助のケースワークを中心とする COS 運動が劣勢な時期に、リッチモンドのこうした主張は、ソーシャルワークが個人への援助志向と運動志向の両側面をもっている機能的特性を表明したということである。それはソーシャルワークの主要な機能の表明である。リッチモンドのソーシャルワークの方法や機能に関

する再発見・再認識は、後に重要視された有名な論考の一つとはいえ、本稿でとりあげる論考などは、ソーシャルワークの歴史の中で評価されるべき点であろう。特に、セツルメント運動系からは、慈善組織協会が重視してきた個人援助、ケースワークを批判し、ケースワークは、ソーシャルワークとみなしていなかった点²²⁾を考えると、リッチモンドの主張は慧眼というべきかもしれない。

このような状況の中で、小売りと卸売りの方法の関係とその役割や意義、小売りの独自存在的主張は、ソーシャルワークの機能特性の原型を示したはじめてのものである。加えて言えば、リッチモンドの主張は、ソーシャルワークの方法の多次的な可能性を示唆するものであった。なお、この当時にリッチモンドは、上記2つの機能論を示したが4半世紀後には、リッチモンドで言うところの「改良の卸売りの方法」は、リー (Lee, P.) (1929) の「運動と機能」(Cause and Function) と題した全国ソーシャルワーク会議会長就任講演の中で、運動の地位は変化させられる。機能 (= 専門職の機能) が優先され、運動はむしろ副次的な扱いを受けるようになる²³⁾。やがて、Lee の路線からか? ソーシャル・ケースワーク、ソーシャル・グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーション (コミュニティワーク) が専門分化発展し、それぞれ、ソーシャルワークの主要な方法として位置づいていく。これとともに、批判を受けながらも、ソーシャルワークの運動という機能特性の退潮を引き起こしていく。そしてソーシャルワークが内外からの批判を浴びるような、ソーシャルワークの危機が起きると運動論が再燃するといった、ある種の循環的状况がもたらされることになる。

3. M. リッチモンドの機能論

— 全国ソーシャルワーク会議成立後

(1) ソーシャルワークの第3の機能論 : 「ソーシャル・ケースワーカーの課題」(1917)

リッチモンドは、後年、個人への援助と社会改良志向をブリッジする機能を見出している。一つは、“middle-man” であり、他の一つは、サービスの組織化である。

前者の例として、1917年の「ソーシャル・ケースワーカーの課題」“Social Case Workers Task” と題する全国ソーシャルワーク会議報告に見られる²⁴⁾。それは、1915年の全国慈善矯正会議で当時のアメリカの医学教育を改革した教育行政官僚フレックスナー (Flexner, A.) が「ソーシャルワークは専門職か?」と題してソーシャルワーカーの行動を分析して見せたことがきっかけとなっている。フレックスナーは、ソーシャルワーカーの行為を、電話交換手に例えて電話交換機のプラグを抜いたり、入

れたりして電話を取り次ぎつなぐような“middleman”（仲介人）の働きと特徴づけた。これに対して、当時その場に出席していたソーシャル・ケースワーカーたちは、あまりにもそうした行動をしばしばしていたことから、リッチモンドたちは、middleman という働きから、方法や目標において、社会関係に関与する自分たちは、全く異なる独自のスキルを発達させてきているのだとあらためて自覚していたことを述べている。リッチモンドは、この論考の中で、まもなく、middleman としての働きをどのワーカーもしなければならなるだろうと述べている。

リッチモンドは、揶揄されたような middleman を逆に違いや独自性として位置づける。リッチモンドにとってみれば、慈善ワーカーは対象となるクライアントの生活困難の解決においては、社会資源の活用、資源との協同によることが援助と考えてきたわけであるから、middleman は当然の働きなのである。この後、middleman とのつながりは、1922年出版の『ソーシャル・ケースワークとは何か』（What is Social Case Work?）のソーシャル・ケースワークの定義「人と社会環境との間を個別的に、効果を調整 adjustments ...」に認められる。また同書の結論のなかでソーシャル・ケースワーカーは、ある種の善意ある middleman ではないが、それでも善意ある middleman であると述べている²⁵⁾。この middleman の発想は、リッチモンドのソーシャル・ケースワークの定義に用いられた人間と社会環境との間の関係に焦点化する視点や、人間と環境とを同時二元的に見る視点を備えていることを示している。こうして middleman という発想が、後々、ソーシャルワークの機能のみならず、実践対象の把握においても重要な地位をもつようになったことはいうまでもない。実際に、この働きは、今日のソーシャルワークの人と環境との関係を媒介、調整、変革するソーシャルワークの象徴的な機能に通じるものがある。

(4) ソーシャルワークの第4の機能論：「ソーシャルワークのリズム」（1923年，1925年）

この論考は、リッチモンドの晩年に当たるもので、「援助技術＝アートの可能性」（“Possibilities of the Art of Helping” in the Long View（584-592頁））という講演記録である。そこでは、図式「ソーシャルワークの発達」が紹介された。ただ、リッチモンドが聴衆に伝えたのは「ソーシャルワークのリズム」としてであった。同じものが1923年にニューヨークスクール（現、コロンビア大学ソーシャルワーク大学院）の学生にも示されていた²⁶⁾。この講演で、リッチモンドは、ソーシャルワークが個人の福祉と集合の福祉をめざして、具体的な機能として(1)個人の改善（individual betterment）、(2)サービスの組織化（organized service）、(3)集合の改善（mass better-

ment）の3つあげている。リッチモンドは、アメリカで慈善組織化運動が起きた1880年直前から、1923年頃までのソーシャルワークが3つの間をどのように動いていたかをスパイラル図として描き、約半世紀の間に取り組みられた多様な活動や運動がどこに位置していたかを示している。サービスの組織化には、例えば、慈善組織化運動、セツルメント運動、ソーシャルワークの訓練、リサーチやサーベイ、社会機関協議会、地域コミュニティ、ソーシャルワーカー協会などを含めている²⁷⁾。

個人の福祉、集合の福祉をめざし、3つの価値と機能を示したソーシャルワークのリズムは、いつの時代にも通底する基本的な枠組みである。運動機能とサービスの組織化の機能を内包して個人と集合の改善に取り組む点は、独自の視点を示し、象徴的な機能の枠組みを備える例であろう。

個人の福祉と集合の福祉は、そのもとでのソーシャルワークの機能として、個人の改善、集合の改善、さらに相互作用する回復（cure）と予防、同様に相互作用する小売的方法と卸売的方法を位置づける。そして cure は予防の一つの形態とする。「社会運動、社会諸機関、ソーシャルワーカーが発達の概念をもつとき、そしてこれら2つの福祉を含めて前進させるとき、2つの見解が調和する。そして各々によって各々の浸透（permeation）を保証するとき、上昇のスパイラルは一方から他の方へのスイングすることによってそのバランスと勢いを失うことはない。... それは、より基礎を、より体系的に力バーするであろう」と個人の改善、集合の改善の重要性を伝えている²⁸⁾。2つの改善の間にサービスの組織化を位置づけているが、それは、2つの改善を支える共通項的で支持的な機能ということになる。このサービスの組織化無くして、2つの改善はあり得ないとみる。リッチモンドの機能の構成的特徴は、個人の福祉と集合の福祉という価値を実現する働きとして個人の改善と集合の改善という2つの主要な機能が位置し、これら2つの機能が適切に作用するためのサービス組織化機能がある。そして、これら3つの機能と相互の関係に運動機能が関連するという構図となっている。当時の福祉政策や制度の未発達の時代にあっては、運動はすべての機能へと通じる水路のようでもある。

リッチモンドの「ソーシャルワークのリズム」は、ソーシャルワークの発達を示すことで、ソーシャルワークの価値と関連づけた機能論として位置づけることができようし、また、それは、ソーシャルワークの機能特性や機能のレベルを明示した例であろう。なお、この論考から、リッチモンドは、技術の属人性、技術の範疇に、価値や機能を包摂していたことがうかがえる。

4. おわりに

リッチモンドの4つの論考は、ソーシャルワークの機能論だけにとどまらない、今日のソーシャルワークの特徴に刻まれるだけの重要な意味と内容をもっていたことはすでに述べたとおりである。

ここでは、あらためて、リッチモンドの機能論的な特性を整理しておこう。

- ・第1は、個人の福祉と集合の福祉という両極の価値を実現する働きを明確に掲げ、そのもとで個人の改善と集合の改善という2つの主要な機能を位置づけ、これら2つの機能が適切に作用するための共通項的で支持的な機能としてサービス組織化機能を加えている。そして、これら3つの機能と相互に関係し合いながら運動機能が位置する。このような構造特性を示していることである。
- ・第2は、個人の改善機能には、慈善の協同と middleman が欠かせない機能として位置づけること。そしてこれら2つの発想は、ソーシャルワークの実践対象の全体論的視点・認識へとつながる可能性をもっている。慈善の協同と middleman は、人間と環境との同時的・二元的な焦点化を促し、両者間の相互作用、関係に介入するという機能の可能性を示していること。これらは、今日の境界介入実践論に通じるものがある。
- ・第3は、慈善の協同の場合は、協同の性質からするとサービスの組織化に位置する機能でもある。
- ・第4は、middleman は、個人援助の象徴的な機能であり、媒介、調整などを通して必要なところと連結する機能である。それは今日具体的に必要視されている連携や協働に繋がる。

以上のようなリッチモンドの機能論的な特性は、必ずしも体系化された機能構成とはいえないかもしれない。また、ソーシャルワークの主要な機能の素描段階かもしれない。しかしながら、今日の貧しい機能論を思うと、リッチモンドの発想の斬新さや重要さがうかがえる。なお、ソーシャルワークにおいては、個人か、社会かで揺れ動いてきた側面があるが、特に福祉国家の登場を契機に、ソーシャルワーカーの多くは官僚制の下に置かれるようになり、radical なソーシャルワークの部分や自由な立場からの実践活動を残しつつも、皮肉なことに、我が国も含めて、ソーシャルワークは、リーの主唱通り専門職の機能遂行型になってきたといっていよい。それは、ソーシャルワークの機能の制限、ソーシャルワーカーの葛藤につながっている²⁹⁾。換言すれば、今日のソーシャルワークは、機能を含めて、そのありようをめぐる重要な岐路に立たされていることを意味している。

注及び引用参考文献

- 1) スチュアート・ウィーン (1922) 高橋梵仙訳『西洋社会事業史』ミネルヴァ書房1961 2-3.
- 2) Gibelman, M (1999). The Search for Identity: Defining Social Work - Past, Present, Future, *Social Work* 44(4) 301-303.
- 3) Morales, T.A. and Sheafor, B. (1995) *Social Work: A Profession of Many Faces 7th ed.*, Allyn and Bacon, 41-46.
- 4) Boehm, W.W.(1958). The nature of Social Work, 3-2 10-18.
- 5) 岡村重夫 (1955) ソーシャル・ワーカーの本質的機能 社会福祉論集 第3号 13-23.
- 6) 平塚良子 (2002) 「第1章社会福祉援助活動の対象 節社会福祉援助活動における機能」米本秀仁・平塚良子・川廷宗之・牧野田恵美子『社会福祉援助技術論 上』建帛社49.
- 7) 岡村重夫 (1979) 「社会福祉固有の視点と方法」『社会福祉体系3 社会福祉の方法』岡村重夫・高田真治・船曳宏保 ミネルヴァ書房 47.
- 8) 岡村重夫 (1979) 上掲書 42.
このほか、1955年以降、機能の一部表現の修正がみられている。具体的な機能については、下記を参照されたい。
岡村重夫 (1968)『全訂社会福祉学総論』柴田書店 160-196.
岡村重夫 (1980)『社会福祉原論』全国社会福祉協議会 114-127.
- 9) Specht, H and Mark E.Cortney, M.E (1994). *Unfaithful Angels: How Social Work has abandoned its Mission*, The Free Press, 75, 80.
なお、佐藤豊道も、ソーシャルワークの理論的系譜を示しているがスペクトラと同じ扱いである。
佐藤豊道(1984)「4講 ソーシャルワークの歴史」『社会福祉入門講座2 ソーシャルワーク：過程とその展開』海声社 26-27.
- 10) Richmond, R. (1901). "Charitable Co-operation" in *Proceedings of the National Conference on Charities and Corrections*, Boston George H.Hills, 298-313.
ここでは、リッチモンドの論文や講演等を Colcord, J.C.が選択、編集したリッチモンドの用いたタイトル The Long View に依拠する。
"Charitable Co-operation" in *The Long View: papers and addresses* by Mary Richmond, Joanna C.Colcord selected and edited, Russell Sage Foundation, 1930, 186-202.
- 11) Richmond, M.(1901). *ibid.*, 186.
- 12) Specht, H and Cortney, M.E. (1994).*op.cit.*, 76.

- 13) “Charitable Co-operation” by Richmond, M., in *The Long View*, op.cit., 188.
この図式については、小松源助（1993）の訳出を参照されたい。『ソーシャルワーク理論の歴史と展開—先駆者にたどるその発達史』川島書店 42。
同書で小松は、force を資源と訳している。しかし、本稿では力と訳す。文脈からは資源と解釈もできるが、リッチモンドは、resource と force を区別している。資源の中にある力を活用という意図が考えられる。
- 14) Richmond, M.(1901). op.cit., 190.
- 15) ibid., 195.
- 16) ibid., 202.
- 17) Specht, H. and Cortney, M.E. (1994). op.cit.,76.
- 18) “The Retail Method of Reform” by Richmond, M, in *The Long View*, op.cit., 214.
- 19) ibid., 218.
- 20) 小松源助 前掲書 44-45 . 小松は、social reform の reform を「改革」と訳したが、筆者は social reform を社会改良と訳す。
- 21) Colcord, J.C. (1930). op.cit., 221.
- 22) 平塚良子（2010）メアリー・リッチモンドによる臨床科学モデルの現代的意義 大分大学大学院福祉社会科学研究科紀要(13), 46 .
- 23) ポーター・リー（1930） 岡田藤太郎訳（1975）
ソーシャルワーク：大義と機能(1)及び(2) ソーシャルワーク研究 1975
岡田は、Cause を大義と訳しているが、Cause をポーター・リーは運動としている。筆者は岡田の大義という訳は運動とする。
Lee, P.R. (1929). “Social work as cause and function” in *Proceedings of National Conference of Social Work*, 3.
- 24) “Social Case Workers Task by Richmond, M.”, in *The Long View*, op.cit., 397-401.
- 25) Richmond, M. (1922). *What is Social Case Work?* The Russell Sage Foundation, 256.
小松源助訳のケースワークの定義例では、「人間と社会環境との間を個別的に、効果を調整することを通じてパーソナリティ（人格）を発達させる諸過程から成り立っている。」（小松源助訳『ソーシャル・ケースワークとは何か』中央法規 1991）
- 26) “possibilities of the Art of Helping” by Richmond, M., in *The Long View*, op.cit., 584.
- 27) ibid., 589.
- 28) ibid., 584.
- 29) マーガレット・ジベルマン、フィリップ・H・シェルビッシュ（1993）岩崎浩三・山手茂監訳 『ソーシャルワーカーとは』日本ソーシャルワーカー協